

スリランカのアルヴィハーラ寺における貝葉写本 Palm Leaf Manuscriptsの作成方法について

三保忠夫*・三保サト子**

Tadao MIHO・Satoko MIHO
On the Process of the Making the Palm Leaf Manuscripts
at Aluviharaya Temple, in Sri Lanka

Abstract

The present description is an on-the-spot investigation into the process of the making the Palm Leaf Manuscripts in Aluviharaya Temple, Sri Lanka.

Key Words: Baiyo, Palm-leaf-manuscripts, Writing-materials, Stylus, Aluviharaya-temple, Sri Lanka

[目次]

はじめに

- 1 コリファヤシの葉の採取
- 2 リーフの作成
- 3 リーフのボイル
- 4 陰干し・曝し・露
- 5 成形と焼きゴテ
- 6 書記作業writing (補筆)
 - (1) 鉄筆Stylus
 - (2) 字体三種
 - (3) 筆刻の方法
 - (4) 筆刻後のペースト
 - (5) 表紙の板材
- 7 ペラデニヤ植物園のコリファヤシ

おわりに

はじめに

筆者は、南アジア、東南アジアを中心として行われたヤシの葉Palm Leaf、即ち、貝葉^{ばいよう}を書き素材とする研究・調査を行っている。本稿は、その一環として、スリランカのアルヴィハーラ寺における貝葉本作成方法についての調査報告（一部）を行うものである。

調査の目的、日時、場所は、次のとおりである。

○調査の目的：貝葉典籍Palm Leaf Manuscriptsの作成方法を調査し、記録する。

○調査の日時：1997年4月25日(金)～29日(火)

○調査の場所：スリランカSri Lanka, マータレMataleのアルヴィハーラ寺 Aluviharaya Temple

これに続き、5月4日(日)までキャンディKandy市内外で調査を行った。

* 島根大学教育学部 国語科教育研究室 (日本語学)

** 島根県立島根女子短期大学 文学科

古刹アルヴィハーラ寺Aluviharaya(Aloka viharaya) Templeは、スリランカの本都キャンディKandyからジャフナJaffnaに向かって伸びるルートA9を北上すること29kmの地点に位置する石窟寺院である。南に4kmほど戻ればマータレMataleの市街である。

スリランカに仏教が伝来したのは、釈迦入滅(483年B.C.)¹⁾の後、3世紀の頃といい、紀元前88年、それまで口承されてきたその教えが、このアルヴィハーラ寺において、初めて文字(Elu, Old Sinhalese)に記されたといえられる。爾来、同寺においては、1848年時の法難を別とすれば、仏陀の教えの実践と共に連綿とした写経活動が続けられてきているのである。

私どもは、その本来的、伝統的な写経方法や書記素材等を調査すべく、同寺を、過去にも二度(1994年3月、1995年12月)、訪れた。しかし、どうしても不明な点が残るため、今回は、特に出願し、寺院内に寄宿させていただき、殊にその素材、また、その作成・調製方法等についての詳細を調べさせていただいた。面倒な願い出にもかかわらず、一山挙げて快く御世話いただいたことを恐縮に存じ上げ、かつ、心から感謝申し上げる次第である。

就中、直接に指導に当たって下さったのは、次の方々である。

Ven.Ethipola Medankara Nayaka Thero(Chief Incumbent of Aluviharaya, Chief Sangayanaka of Matale District) [Chief Priest]

Rev.Ethipola Ratanasara Thero

Rev.A.Saranankara

Mr.T.S.Randiligama(Chief Organizer Thiripitakaya Writing Council)

Mr.H.M.K.Bandara (Gampathi Niwasa,Wariyapola, Katudeniya,Matale,Sri Lanka)

Bandara氏は、同寺における写経専門員である(Technical Expert for Writing)。

以下に、ヤシの葉の採取に始まる一連の貝葉ola作成方法²⁾を中心とする調査報告を行う。

1 コリファヤシの葉の採取

スリランカでは、写経用の料紙writing paperとしてTala gasa(または、Tala gaha)の葉Tala kola³⁾、即ち、コリファヤシの葉が利用されてきた。調製されたこの料紙を、オーラolaと称する。

コリファヤシは、学名*Corypha umbraculifera* L.、英名タリポットヤシTalipot Palmである。写経用には、少なくとも今日では、これのみが用いられている⁴⁾。但し、正

確には、用いられるのは、葉(掌状複葉)のまだ開かない、その若い葉芽budのみであると付け加えねばならない。このヤシについては、前稿(注4文献)に詳述した。

この度のコリファヤシの葉芽の採取、また、その調製(ボイル、等)は、1997年4月26日(土)の朝から昼過ぎにかけて行われた。この間の次第を、時間の経過と共に記述しておこう。次のとおりである。

4月26日、午前6時08分、起床。晴れ。

8時05分、コリファヤシの葉の採取のため、アルヴィハーラ寺の僧坊をワゴン車で出発し、マータレのウクウェラUkwelaに向かう。車には、Chief PriestのVen. Ethipola Medankara Nayaka Thero長老(73歳)、Rev. Etipola Ratanasara Thero師、運転者、我々二名が乗車した。[この他に、Rev.Buddharakkitha Galaboda少年僧一人が同乗したが、彼は、途中のマータレの町で下車した。これから学校に行くのだという。]

自動車は、寺の門を出て南下する。マータレの町を少し過ごした8時20分の時点で、車は鋭く左折し、山間の道に入る。2、3メートル幅の村道である。ままた、民家が続き、周囲にはバナナ、ココヤシ、スパイスなどが栽培されている。路上や路端で歯磨きをしている村人に出会う。

8時24分、車は、上記のBandara氏の自宅前で一時停車し、同氏、同氏の子息、作業員の青年・少年各一名が乗車する。ロープとナタ(手斧)も積み込まれる。

車は、さらに奥へ進む。8時27分、左折し、舗装のない道を、やや下るような形で進む。

8時28分、車は、一戸の民家の前に停車する。この辺りがウクウェラである。

家の周りには、バナナやココヤシ、その他の木々が植えられているが、それらに混じり、軒先から10~15メートルほどの裏手に、一本のコリファヤシが生えている。下の方の幹は、ささくれた鎧のような葉柄(の残骸)に守られているが、まだ若い木で、高さは10~15メートルくらいであろうか。この種のヤシは、樹齢40~60年にもなれば30メートル前後の高木となり、やがて実をつけ、枯死するに至る。

仰ぎ見ると、葉が開き茂った樹冠部の中心に、4メートル弱くらいの棒状の葉芽bud(幼葉)が、天に向かって突き立っている。このヤシ類も、季節になると、まず、こうした形で葉芽が伸びてきて、伸びたところで葉が開くのである。

8時30分、葉芽を切る役目の少年が、そのヤシの木の根際に膝を着き、深く低頭、合掌して祈る。数秒の短い

ものだが、経典を写すための料紙を切り取るのであるから、それに先立って祈りを捧げるのだと説明される。

8時32分、その少年は、腰にロープの一端を結び、背にナタを差し、新・古の葉柄を手掛かり、足掛かりとしてヤシの木に登る。少年は15歳くらいである。葉柄は剛強で、縁辺に刃物のような強鋭刺を持つから危険である。ロープは、ヤシの繊維で作った太さ4センチくらいのものである。

樹冠部に至った少年は、ナタで葉芽（〔第1図〕参照）の下部に切込（ロープ用・A部）を入れる。コンコン硬い音がする。切込幅7センチくらいである。

8時33分、腰のロープをほどこき、この一端を今の切込（A部）に結ぶ。次いで、ロープの中ほどを、隣の成長して葉の開いた葉柄に結ぶ。生え際1メートルくらいの辺りに仮結びするのである。

切込（A部）の下34センチくらいの部分に、三、四方からナタを入れる（B部）。

8時37分、ナタを腰に差し、右手で葉芽を押す。葉芽は左方に倒れ、その辺りの開いた葉に受け止められる。しかし、B部の一部がまだくっついていたので、もう一度、ナタをふるい、完全に切り離す。

切り離しを完了した後、仮結びを用心深く弛め、解いていく。この折、支点として、傍らの葉の柄を利用し、ロープの他の一端は木の下の子が持ち支える。宙ぶらりとなった葉芽は、下の青年が、その手を緩めるに従い、頭を下にして下りていく。

8時45分、下ろされた葉芽は、Bandara氏により、その肩に担われるようにして、ワゴン車に運び込まれる。樹上の少年は、ナタを腰に差して木から下りてくる。

8時48分、間近に寄って触ってみれば、葉芽は、長さが3メートル余りもある。幼葉とはいいながら、全体に堅く、各節葉はかっちり閉じている。全体で一本の棒のようである。先端部の形や反り具合などからすれば、より正確には、その形態は、まるで巨大な木刀のようであるといつてよからう。切り口は、みずみずしい黄緑色をしている。

8時50分、その民家を立出する。車のエンジンを始動し、細い道をバックする。

以上は、コリファヤシの葉の採取の状況について述べたものである。Ven.Ethipola Medankara Nayaka Thero 長老以下の見守り中、この葉の切り出しに要した時間は、実質20分ほどであった。

この後、帰途につくが、三地点を迂回し、同ヤシを観察させていただいた。次のような状況である。

8時55分、マハヴェリ川Mahaweli Gangaを渡る。この

川は、ヌワラエリヤNuwara Eliyaの高原地帯から東海岸のKoddiyar Bayに注ぐスリランカ最長、また、最大の流域をもつ大河である。ペラデニヤ、キャンディ、また、マータレなど、あちこちに支流があり、ここもその一つであろう。

8時59分、山間の緩い坂道の途中に停車、下車する。右手のやや低くなった傾斜地の樹林の中に、頭部を突き出している一本のコリファヤシを見出す。樹齢40年か50年かといひ、樹高は20~30メートルで、樹冠部に大きな肉穂花序を広げている。花序（穂）だけでも10メートル前後はあろう。しかし、これは開花期を終え、結実期も半ばを終えようとする時期のものらしい。悪い足場を近づいてみる。地上部1メートルの幹周りは、1メートル15、16センチの太さである。環紋のみで、葉柄の残骸は付属していない。仰ぐと、上の方にはガサガサとした白い垂れ気味の下葉が見えている。地面には、辺り一面に実seedsが落ちている。聞けば、この実の数は“million”とも“thousand million”とも“ten thousand”とも答える。これらは、膨大な数を意味するのであろうが、正確なところは、実際に数えてみないとわからない。

手に12、3個を拾う。実の色は、水分を吸って黒色、または、こげ茶色だが、乾けば薄いこげ茶色となる。形態は、大体、球形といってよいが、大きいものの縦径と横径は24ミリと22ミリ、小さいもののそれは14ミリと12ミリ、平均は、およそ20ミリと16ミリといったところであろうか。この大きさは、後に訪れたペラデニヤ植物園の場合よりも小さい。ヤシの成育条件、あるいは、結実の早期・晩期といった条件などによって差異が生じているのかもしれない。

気温は高く、湿度は多い。だが、太陽の光線は高木に阻まれ、地上部は、意外に涼しい。辺りには、つる性のペッパーやコーヒーの木が植えられている。傍らに、ヤシの葉を葺いた粗末な作業小屋もあった。

9時15分、出発。

9時20分、少し下った、開けた地に出る。やや大きな川がある。橋の上で下車する。下の河原では、村の婦人達が楽しそうに談笑しながら洗濯、沐浴している。指差された、遠く、畑の向こうを見ると、樹林の中に、一本の電信柱のようなものが突き立っている。30メートル前後の高さであろうか。樹冠部は全くなく、遠目には、その頭は平らのように見える。幹には環紋が見える。これが、枯死したコリファヤシである。花穂（肉穂花序）がポロリと落ちた後であろうか、その後の幹部だけがストンと突き立っているのである。目を凝らせば、それでも若干の白っぽい枯れ葉の垂れ下がっているの見える。

9時27分、出立。

9時30分、停車して、道に並行する電線の向こうに立つ一本のコリファヤシを見学する。20メートルくらいの立派なものである。

この辺りの一帯は、山間部の谷間のような地形であろうか、地下には豊かな水があるらしい。コリファヤシは、こうして、また一本、また一本と見出されるのであった。

9時42分、山中を抜けて、Bandara氏の自宅前に戻る。同氏の他の三人が下車するが、同氏は、我々と共にアルヴィハーラ寺に向かう。

9時46分、発車。道を下り、先に鋭く左折したポイントを、逆に右折する形でルートA9に戻る。左はキャンディ、右はマータレである。

9時55分頃、マータレの町を抜ける。

10時03分、寺に帰着、と思ったが、門内の前庭に店を張る屋台の前で停車し、皆にキング・ココナツ(Thanbili)1個ずつを買っていただく。渴いた喉を潤すようにとの、Chief Priestの御指示であった。

10時07分、僧坊に帰着、下車。僧坊の客室で一休みしてキング・ココナツをいただく。ストロウで飲む。

室内の気温、摂氏30.5度。

2 リーフの作成

僧坊は、鉄筋コンクリート二階建てである。図書館の背後、一段低くなった広場の片隅に位置する。韓仏教徒(壺 鷲山通度寺等)の協力もあり、1993年10月、それまでの木造物が建て替えられたらしい。

僧坊の一階の中央部は、周囲の廊下より一段低く作られて多目的広場ようになっており(コンクリート)、大きな天窗からは明るく光線が差し込んでいる。リーフの切り出し・作成は、ここを作業場として、同日の10時20分から行われた。

ナタをふるって、まず、節葉leafletsの切り離しを行われたのはRev.A.Saranankara師である。まだ若い(31歳)左利きのお方である。介添えは、初めは若い寺男(A)一名であったが、途中からRev.Buddharakkitha Galaboda少年僧(12歳)と、Karunaseewa Seruwawila少年(12歳)の二名が加わった。また、続く節葉の切り出しを行われたのは、同師とBandara氏との二名であり、同少年僧、同少年、及び、寺男(B)の三名が補助作業を行った。

持ち帰られた葉芽budは、全体が緑(若緑)色をしている。全長3.28メートル。背部は、丸く馬蹄形にふくらみ、腹部は、下半分ほどが馬蹄形に窪んでいる。先端部は、丁度、木刀の先端のような形である。先端から10センチ

下の部分の周囲(太さ)は9センチ、中程のそれは27.5センチ、基部の切断部のそれは33.4センチである。[第1図](a:葉芽の外観、b:基部拡大)

葉芽は、まだ開かない一枚の葉(掌状複葉)である。開けば、深裂して80~100の裂片を数えるとされる。葉柄の先の放射状につく小葉を節葉leafletという。葉は、節葉の集合体でもある。

葉芽の場合、節葉同士はぴたりとくっついており、各節葉は、主脈ribで二つ折となっている。節葉の下部は、また、副脈midribで二つ折につながっている。

節葉の主脈は、互いに密接し、葉芽の、その堅い背部を形成している。が、一番外側の主脈列の内側にもまた主脈列が並んでいる。外側の主脈は、断面が鈍角三角形をなして、基部のあたりではその底辺、即ち、主脈の背の幅は11~13ミリもある。[第2図](葉芽背部の断面、一部)

節葉の副脈も互いに密接し、同様にして葉芽の腹部を形成している。

写経の料紙olaを作るには、節葉を切り離し、さらにこれらの主脈、副脈を除去しなければならない。大体、葉身は、葉芽の中央部に位置するものほど、長い、幅広の料紙が採れる。色は、おおむね、タマゴ色である。最外部の緑色のもの、あるいは、幅5センチくらいの葉身や短い葉身は、当寺では(経典に)利用しないということであった。

[第1段階] Rev.A.Saranankara師は、まず、広さ二畳ほどの一枚の蕙を敷き、葉芽を横たえ、その基部に跪座する。左手にナタを持つ。長い葉芽は、その背部は手前に、腹部は向こうにむけられており、また、その先端はずっと左方に、基部は右手前方にして、横たえられている。基部の下には、枕として、長さ59センチ、直径13.1センチの丸太棒が差し込まれた。

最初のナタ(1)は、基部の切断面から41~42センチの辺りに入れられる。2、3度ほど、V字型に切り込み、節葉の一塊り数枚ずつを切り出す。剥がせるだけ剥す。

次に、切り込みの部位を左方へ8センチほど移し、ナタ(2)を加え、ここで節葉5枚ほどを切り出す。さらに、左方にナタ(3)、ナタ(4)を加え、数枚ずつ、10枚ほどの節葉を切り剥す。これで葉芽の片面からの節葉の切り出しがほぼ終わる。葉芽は、裏返され、やはり、基部の方から、ナタ(5)、ナタ(6)、以下、ナタ(9)が加えられ、節葉の切り離しが行われる。[第3図]

こうして最後には、葉芽の下部の背骨のような部分(84センチ)だけが残った。[第4図]

[第2段階]

上記の作業に並行し、Rev.B.Galaboda少年僧、K.Seruwawila少年らによって、次が行われる。即ち、そうして切り離された節葉は、基部近くの副脈の部分でくっついているものが多いので、ここを引き裂き、節葉（主脈で二つ折になった状態のもの）毎に分離させるのである。これは手で引き裂いていけばよい。しかし、扱うのは、長い、柔らかい葉であり、ために、身長のない少年らは、背伸びをして腕を上げたり足の指を使ったりして奮闘しなければならないことになる。

傍らに、主脈rib付き（二つ折）の形でばらばらにされた節葉が、積み上げられ、小さな山となっていく。

[第3段階]

主脈rib付きの葉は、左右の端を切り捨て、主・副脈を切り落とす作業に移る。料紙olaの切り出しである。この時、後で筋紐を通す穴も切り開ける。用具は、小刀かナイフを用いる。

手順には、次の二様があるようである。

Bandara氏の方法：[第5図]

- ① 右端から10～20センチの辺りで、主脈に向かって直角に刃を入れる。
- ② 小刀を手前に向け、刃を上に向き立てるようにして、①の部分から先端部近くまで、副脈を切り落としていく。(この副脈の一部は、葉のボイル後に、孔に通す筋紐などに利用する)
- ③ 次の作業のため、この部分の主脈を20センチ前後、切り下げる。
- ④ その20センチほどを引き起こし、二つに折る。その折山△型の頭に斜めの切り込みを付ける。これを開くと、15ミリ前後のV字型の切り込み穴ができていく（穿孔）。
- ⑤ 主脈を切り落としながら⑥の部分に至る。(切り落とされた主脈は、一見、割り竹のようである)
- ⑥ 主脈を背に、直角に刃を起し、先端部35～40センチほどを切り捨てる。

以上の結果、原料紙ola二枚が同時に切り出されたことになる。

Rev.A.Saranankara師の方法：[第6図]

- ① 先端部を35～40センチほど残し、主脈に向かって直角に切り込む。
- ② 先端部から基部に向かって、副脈を切り落とす。
- ③ ①の切り込みに接して、20～30センチほど、主脈から切り離し、引き起こす。
- ④ 引き起こした頭部を、×印を描くように二回、折り畳むと、先端部に角山ができる。その角の先を5～10ミリほど切り落とす。開くと10～25ミリくらい

の菱形の穴ができていく（穿孔）。

- ⑤ 主脈を、基部に向かって切り落としていく。
- ⑥ 基部の10～20センチほどを残して、葉身を切断する。

以上の結果、二枚の料紙が同時に切り出されたことになる。

その一枚は、長さ190センチ前後(160～200センチ)、幅7センチくらいであった。幅5センチ前後以下のものは捨てる。

[第4段階]

Bandara氏、Rev.A.Saranankara師の作業に並行し、Rev.B.Galaboda少年僧とK.Seruwawila少年らは、切り出された葉身を巻いていく。

葉身は、穴のない方から丸く巻いていく。その一枚の巻き終るころ、次の葉の頭を10センチほど内側に挟み込む。このようにして、次々と葉を巻き込んでいく。巻物が、やや大きくなって扱にくくなると、彼らは、それを床に置いたまま、回しながら巻いていく。途中、緩むので、時々、引っ張って引き締めながら巻いていく。やがて、バーム・クーヘン状となる。直径30～35センチくらいで一巻きとする。

一巻きできると、四本の筋紐を四ヶ所に掛け、結ぶ。この紐も、先にそぎ落とした副脈そのものである。

この日は、一本の葉芽から一巻と半巻のバーム・クーヘンができた。

3 リーフのボイル

リーフの束(巻物)を脇に置くと、そのボイルboilの準備が始まった。11時05分である。

この段階で用意されるのは、次である。

- A 巻いたリーフの束。
- B 若いアナナースannāsi・リーブズ、即ち、パイナップルpine-appleの葉。長さ1メートルくらいで、基部の辺りが白い。
- C パポルpāpol・リーブズ、即ち、パパイヤpapaya (Carica papaya)の葉と未熟な若い実(濃緑色、長さ12、3センチ、下方の太い部分の周囲23～25センチ)。これらの生葉や果実(の乳白色の汁液)には、加水分解酵素ペプシンが含まれており(papain)、これがリーフを保護し、かつ、それを柔軟にする働きをする。
- D カッペチヤkāppechiyā koḷaの茎・葉(茎の切り口から葉の先まで65センチほどを用いる)。この葉は薬草(外傷薬)であり、良い香りがする。緑

色のヤシの葉を白くするのに効果があるらしい。

E 水 (水道水)。

F 両方に把手の着いた厚手の釜。小型のドラムカン状のもので、直径40.5センチ、高さ44.0センチ。

これらの内、B、C、Dは、Bandara氏宅で積み込まれようで、節葉leafletsの切り離し以前から作業場の片隅に置かれていた。

ボイルの手順は、以下である。

まず、空のままの釜 (F) を作業場に置く。これに、順次、次を入れていく。

- ① パパイヤ (C) の、(葉の付け根で) 葉柄部を切り除いた葉だけを4、5枚、ていねいに釜の底に敷く。
- ② カッベティアの茎・葉 (D) をつまんで、三度、入れ、敷く。
- ③ パイナップルの葉 (B) 一握り4、5本を手にし、これを白い基部の方から10センチ前後に切りながら、釜に入れる。葉の先端の、尖った10センチほどは捨てる。
- ④ パパイヤの実 (C) を、元の方から、黒い種もそのまま、乱切りにしながら、1ヶ分入れる。
- ⑤ これらの上の中央に、巻いたリーフの束の一巻を、水平な状態で入れ、置く。

以上を第一層とする。以下、同様のことを繰り返す。

- ① パパイヤの、葉柄部を切り除いた葉だけを、かぶせるようにして、3枚ほど入れる。
- ② カッベティアの草 (茎・葉) を5、6本、また、さらに若干を、入れ敷く。
- ③ パイナップルの葉、6本ほどの一握りを10センチくらいに切って入れる。先端10センチほどは捨てる。
- ④ パパイヤの実を、へタの方から、厚さ1センチくらいの輪切りにし、また、次いで、黒い種もそのまま、乱切りにして、1ヶ分入れる。料理のシチューに入れるようにして入れる。
- ⑤ これらの上の中央に、巻いたリーフの束の半巻を、水平な状態で入れ、置く。

以上を第二層とする。

- ① パパイヤの、葉だけを、かぶせるようにして、4枚ほど入れる。
- ② カッベティアの葉・茎を一つかみ、かぶせるようにして入れる。
- ③ パイナップルの葉を一握り、10センチくらいに切って入れる。先端10センチほどは捨てる。
- ④ パパイヤの実を、へタの方から、3枚ほど輪切りにして入れ、後は、乱切りにして、1ヶ分入れる。以上を第三層とする。但し、この層の上には、残って

いたパパイヤ (C) の葉柄部を、30~40センチくらいに切って入れる。

作業場におけるボイルの準備はここまでである。従事されたのは、Bandara氏であった。

11時15分、上記の釜は、同氏の手で僧坊の裏庭に持ち出された。

同氏は、まず、適当な場所に、子供の頭くらいの石、3ヶを並べて炉を作る。石に大小があるので、その上にココナツヤシの実の割れた殻を置いて高さを調節し、釜を据える。釜の底は、地面より16センチくらいで安定させる。

Rev.B.Galaboda少年僧と寺男が、大きな水差しで水を汲んできて、釜に注ぐ。また、寺男は、両手で持てるほどの中くらいの石を洗ってきて、釜の中に入れる。これは重しである。内容物が浸り、石がかぶるほどに、水を注ぐ。最後に、釜の上に、四角いトタン板をかぶせる。密閉するのではない。隙間から内容物が見えている。

11時25分、点火。Rev.A.Saranankara師以下の見守る中、寺男が、ヤシの実の核殻に少しの油を入れ、火を付ける。火は、小枝から薪に移っていく。火力は、強くもなく弱くもなく、ふつう程度である。

このボイル作業は、水から始めて沸騰させる。普通、3時間ほど要するという。しかし、この折は、1時間50分でボイルは終了した。Rev.A.Saranankara師によれば、中の、濃緑色したパパイヤの実が煮え上がり、黄色くカボチャの煮えたような状態になるのが、ひとつの目安のようである。

13時15分、火を消す。

火を止めた後、木切れを使い、釜の中のリーフの束を引き出し、ヤシの葉で編んだ筵の上 (Bandara氏)、あるいは、空の大きな金タライの中 (Rev.A.Saranankara師) に置く。そして、結ばれていた筋紐を切る。丸まったオーラは、まるで、茹で上がったタケノコのような形、肌、色をしている。

別の未使用の筋紐を用意し、これにリーフ一枚ずつを貫き、通していく。前項、第3段階における④の切り込み穴 (穿孔) は、この時のためのものである。

熱いリーフを、ロールから一枚ずつ引きはがしては貫き通し、引き伸ばしていく。大体、15、16枚を一まとまりとし、筋紐をくくり結ぶ。

両腕で捧げ持つと、裾が地に這い、丁度、吹き流しのよう感じとなる。しかし、裾には長短があって一定しない。これは、葉芽から切り離された節葉そのものに長短・大小があるからであり、その差は20センチ前後にもなる。

くくられた束は、僧坊の裏にある、寺男たちの居住する屋舎の内の、風通しの良い、雨の吹き込まない場所に懸け吊され、陰干しとされる。この折は、都合6束(6条)が、梁に懸け渡されたシュロ縄に吊された。この時、13時40分であった。

用済みとなった釜の内容物は、すべて、裏の畑の脇に捨てられた。

以上、リーフの切り出しからここまでの所要時間は、3時間40分ほどである。

4 陰干し・曝し・露

茹で上がった後のリーフは、約2日間(あるいは、3日間)、吊して陰干しにされる。

この後、リーフは、屋外に出され、僧坊の前庭の、砂土の上か石段の上かで、太陽の状態にもよるが、2、3日、日向で干される。晴れた日に行い、雨天は避ける。朝出して、夕べに入れるようにして、陽に曝され、干し上げる。リーフは、長いままでガサガサ、バリバリに乾燥する。

次に、リーフは、朝夕の露dewに当てられる。即ち、朝の3、4時頃に朝露に当てる、または、夕方・夜に夜露に当てるという作業が3、4日繰り返される。

この時分の気温(摂氏)は、朝は26度くらい(6時)、夕方は28度(17時)、あるいは、25度(20時)くらいである(実測)。

こうして後、リーフは、再び、巻き納められ、筋紐でくくり結ばれる。やや湿った状態であれば、巻くのもきれいにできるとのことであった。ロール状の巻物は、このアルヴィハーラ寺の図書館の一階に運ばれ、次の工程を待つことになる。

なお、先学の文献には、この後、リーフは、キッチンの上階に蓄えられ、その煙smokeに当てられる、と説かれるものがある⁵⁾。そこで、Rev.A.Saranankara師に、その工程の有無を質問したところ、「行わない」との返答であった。

他の寺院では行いが、この寺では行わない、のか、以前は行っていたが、今は行わない、のか、あるいは、以前でも、他寺でも、まったく行わない、のか、この点についても説明はなかった。尤も、今日は、木を燃やすことの少ない時代ではある。

5 成形と焼きゴテ

図書館は、山門(正門)を真直ぐ入った奥、高台の上

に位置する。白、黄、赤の花を着けた temple・フラワーやパンチパーニー、また、ココヤシに囲まれた、白い鉄筋コンクリート二階建ての建物である。この一階は、什宝展示室兼写経の試作実演場、二階は、写経室兼貴重図書室となっている。

一階の左手片隅には、再び、巻き納められたリーフがたくさん積み置かれ、また、脇には、束のほどかれた作業中のリーフがガサガサと置かれている。これらは、おおむね、その葉面を磨き上げる polish という工程を待つものである。

磨くのは、その必要が生じてからでよからうが、これは、次のようにして行われる。

ロール状のリーフは、まず、3、4時間、水に浸しておく。湿めったリーフを引き出し、頭上に架け渡したアレカヤシの幹(横木)に掛け、摩擦する。この木の肌はツルリとしていて磨くに最適だからとされるが、しかし、現在、このアルヴィハーラ寺で用いているのは、アレカヤシの木ではなく、ルッタナの木 Ruk Attana tree であるという (Rev.A.Saranankara師による)。

リーフの一方に、直径15センチ前後の石を結び付けて左手に載せ、リーフの他方を頭上の幹に回して手前側に掛け垂らす。この掛け垂らした方の端を右手(また、左手)で持ち、上下させる。10分間ほどすると、リーフの表面は、幹で擦れてツヤツヤになる。こうして、両面ともなめす。

リーフの両端は磨き切れないが、この部分は、幅も狭く、当初より写経用に使用するつもりではないようである。

同26日、13時45分、今回も、その磨き方を教えて下さったのは、W.Edwin氏(72歳)であった(注4参照)。これで3度目である。同氏は、毎日、キャンデイから通勤され、この写経の試作実演場で訪問者のための解説、実演を行っておられる。アルヴィハーラ寺におけるオーラによる Tripitaka 書写・保存の営みは、やはり、国内外の多くの人の理解と喜捨を必要とするのである。

磨き終わったリーフは、二階の写経場へ上げられ、成形の工程に回される。

成形には、1メートルくらいにカットされたリーフの一束、黒い成形用宛て木(オーラの必要とされる大きさより長めのもの)二枚、L字型の締め金具二本(ボルト二個、カマセモノ四個も)、鉄筆、穿孔用金具、焼きゴテ二種、その他が用意される。[第7図、(a)]

成形用宛て木は、当然、必要とされるオーラolaの大きさ：長さ・幅[第7図、(c)]によって使い分けられるが、ここでは今、大型の Tripitaka 書写用のものが用いられて

いる。綴じ紐用の穴の位置には穴も開けられ、余分なリーフを裁断するための箇所には、それを誘導するための溝も着けられている。厚さ2センチほどの黒色の、極めて堅い材質であり、この宛て木に従って、リーフに綴じ穴を穿ち、その左右上下の裁断、また、焼きゴテによる成形などが行われる。

なお、この折、宛て木に付された綴じ穴の位置について確認したところ、先学の示された基準に外れるような状況は観測できなかった(注4文献, 70頁, 右)。

成形の作業は、こうである。

まず、床に一枚のゴザ(畳表)が敷かれ、Rev.B.Galaboda少年僧一人があぐらをかいて座る。彼の前には、下敷きとする幅広の白木の厚板(必要とされるオーラより大きめのもの)も置かれる。

少年僧は、リーフの東から一枚のそれを抜き取り、厚板の上にこれを置く。置いたその上に、宛て木の一枚を宛てる。この宛て木により、“必要とされるオーラの面積”⁶⁾がそのリーフの内側に納まることを確認する。この時、リーフがまっすぐでなかったり、短かったり、幅が足りなかったり、傷や汚れがあったりすると、除外する。

次に、綴じ穴の位置を確認すると、長い鉄筆stylusを握り、その先端を用いて、宛て木の上から穿孔すべき場所二ヶ所に印をつける。13時55分。

宛て木を取り除け、その印に従い、穿孔用の金具で綴じ穴を開ける。この金具は、長さ12センチほどの鉄棒で、先端に直径4、5ミリの円形の刃が着いている。これを右手に持ってリーフに押し当て、押し回し、穴を穿つのである。

こうして二穴の穿たれたリーフは、隣に座っている手伝いのK.Seruwawila少年の手に、次々と渡される。その少年は、もう一枚の宛て木の上にこれらを積み重ねていく。この宛て木には、L字型の締め金具二本が、所定の箇所に、下から上へ、通されている。宛て木の上部には二本のボルト棒が突き出た形となり、ここにリーフの二穴が通されるわけである。リーフの表か・裏かについては、特に注意しているようには見受けられない。

20枚ほどのリーフがたまると、少年僧は、この上に、彼の用いていた宛て木をかぶせ重ねる。締め金具の頭部のネジにはボルトがはめられ、これが締められる。サイコロ型のカマセモノ(二個ずつ)も使われる。この時、二枚の宛て木の向きは、互い違いとなっている。[第7図(b)]

二枚の宛て木でリーフをしっかりと締めた後、宛て木の周囲からはみ出た部分の裁断が行われる。見たところ、裁断は、①リーフの上端(小口部)の左半分、②リーフ

の左端、③リーフの下端の左半分、④リーフの下端の右半分、⑤リーフの右端、⑥リーフの上端の右半分という順序、即ち、リーフの周囲を一周する形で行われるようである。この裁断作業は、Rev.B.Galaboda少年僧がナイフを持ち、K.Seruwawila少年が手伝って行われた。

これらの内、①、③、④、⑥は、宛て木の側面を上に向き、その側面中央部から刃を手前に引く姿勢で、不要部をそぎ落としていくのである。また、②、⑤は、宛て木を平たく置き、その狭い方の端にナイフを直角に当て沿えて、裁断する。この折、互い違いとなったもう一方の宛て木(の溝の部分)がまな板代わり(誘導部)となる。この宛て木は、従って、とても堅い材質でなければならない。

以上で、リーフの周囲の裁断が終わる。次には、その四辺部と綴じ穴(内側)に焼きゴテが当てられることになる。これはBandara氏によって行われた。

宛て木に挟んだままのリーフを持ち、Bandara氏は、裏庭に出る。たまたま、この日は、先刻、リーフをボイルした釜場があったので、ここで、再び、火を燃やし、焼きゴテを焼く。コテは、平板状(5センチ×10センチくらい)、棒状(直径3ミリくらい)の二種が用いられる。

まず、焼けた平板状のコテを用い、宛て木の四辺に沿って当てていく。切りムラや不要の毛羽立ちを焼き焦がし、きれいに整形し、同時に、その炭化によって腐敗や虫損から守るわけである。次に、ボルトの一方を外し、焼けた棒状のコテを、綴じ穴の上方から2、3回、貫き通す。下方からも2、3回、貫き通す。綴じ穴の内側も焦がし整え、保存に備えるのである。再び、コテを火に入れながら、ボルトを締め戻し、他方のボルトを外す。この綴じ穴も、同様に、上方から、また、下方から、焼きゴテを通し、その内側を焦がし整える。焦がし終わったら、ボルトを締め戻す。これで、焼きゴテの作業は終了する。

宛て木に挟んだままのリーフは、再び、図書館の二階の写経室に持ち帰られる。ここでボルトと宛て木が外され、Bandara氏によって、その出来栄が吟味される。

以上により、リーフは書記用のオーラolaとしての調製を完了したことになる。

葉の採取からそのボイル、及び、陰干しまでは、やはり、一ケ日に行くべきであろうが、その全工程を振り返ってみると、それは、余りにも手早く、スムーズであった。また、それぞれの作業・工程は、よく分業が行われ、効率よく進行している点、印象的であった。

6 書記作業writing (補筆)

オーラolaに文字を筆刻する方法については、おおむね、前稿(注4文献)に述べたので、多くは省略する。ただ、今回、確認できた次の点について記しておきたい。

(1) 鉄筆Stylus

これは、シンハラ語でパンヒンダPanhiṅḍaという。これには、実に様々な形態があり、また、材質にも鉄、真鍮、銀などがある。専門家は、長さ26~30センチくらい(短ければ21センチ余、長ければ36センチくらいのももある)の先の尖った、矢羽根型の頭部を備えたものを用いる(注4文献)。矢羽根部は、正しくはパトラpatra、即ち、リーフleafといい、ここには、縦筋や模様などが刻まれており、宗教・習俗上、それぞれに意味や名称が伝えられているようである。

筆者は、この矢羽根部がどのような働きをするのか、かねてより気になっていた。この点につき、Rev.A.Saranankara師に問うと、これは、やはり、バランスを取るためのものであるとの解答を得た。即ち、シンハラ文字は、丸い文字であり、こうした文字を書く時、その羽根が、肘の上くらいで輪をえがくようにして、パンヒンダを使用していくのだ、と言われる。

なお、Bandara氏の使用されているパンヒンダは、長さ30センチほどの真鍮製のものであるが、同氏は、これを黄色く細長い専用の木箱に収容されている。パンヒンダが曲がったりすればバランスが崩れ、筆刻に支障をきたすのである。

(2) 字体三種

先学には、「写字者たちには三流派があり、各々は、文字を記していく場合に、それぞれ独自の字形を有している。」(Silva氏の『目録』解説、14頁、注6文献参照)とされ、これらの字形は、haja象、sinhaライオン、hansa白鳥、として知られている、と述べられるものがある。その三種とは、haja：豊満で丸まった字、sinha：方形の字、hansa：肉細で幅の狭い字、であり、「こうした字形についての綿密な研究により、通例、その写本の作成された地域を特定することができる。」ともされる。

これに対し、書写には「三種の書体Three distinct styles of writingが用いられた、(即ち)、hasthi(象)：大きく書かれる文字、sinha(ライオン)：丸く書かれる文字、そして、hansa(白鳥)：優美な、小さく書かれる文字」(Ratwatte氏、注2文献参照)とされる説もある。

これらの内、いずれが正しいのか、Bandara氏に問うたところ、同氏は、その是非については発言されなかったが、字体Letterに三種類があるとして、Elephant Letter(haja象)：(筆斜体のような形で、丸い大きな字)、Lion Letter(sinhaライオン)：(起筆部に小さな丸い飾りを伴うような書体、丸い字)、Hansa Letter(hansaスワン)：(一字ずつ独立したブロック体のような、上下の幅の狭い、あるいは、小さい字)、の三種の文字を書いて見せられた。

(3) 筆刻の方法

Rev.A.Saranankara師の筆刻の方法

まず、壁を背にし、分厚い座布団に、脛を交差させるようにして座る。前に経机がある。

同師は、左利きである。左手に長いパンヒンダを持ち、右手にオーラ8~9枚を持つ。

オーラは、手のひらの上に置き、親指を、その上に置く。親指以外の四本は、伸ばして揃え、オーラの下面からそれを支える。筆刻中、オーラと腕とは、120度くらいの鈍角を形成する。パンヒンダの先端は親指の先あたり位置し、ここで文字を書くことになる。

パンヒンダは、先端から5センチ前後のあたりをその親指と人差し指で持つ。パンヒンダの先端から1~2センチ辺に中指の先の腹を当て、これを動かしながら文字を筆刻する。この時、薬指と小指の二本の先端は、オーラの葉面に接して右手を支える形となる。

両手は、膝の上方で、宙に浮いた形で働いている。膝に腕を着けることもあるかもしれないが、今回、目撃することはなかった。

利き腕がいずれであろうと、パンヒンダ、オーラの使い方、筆刻の姿勢などは、誰人にも共通するであろう。

なお、筆刻の終わった経典は、校正proofreadingを経なければならぬ。このアルヴィハーラ寺では、Bandara氏が筆刻された後、Rev.A.Saranankara師がこれを担当されていた。

(4) 筆刻後のペースト

文字を刻んだ後のオーラには、次のA、B、Cで作ったペーストが擦り込まれ、その後、Dの白い粉が擦り込まれる。

A ガドゥマ・アングル

B カクナ・オイル

C レジン・オイル

D クラッカクKurakkanの粉

ガドゥマ・アングルGaduma Anguru (Geduba Aguru

とも綴る)は、丸く、また、角ばった1~2センチくらいの小粒の消し炭である。Gadumaは、植物名(シンハラ語)。この炭の何個かを砕いて粉末にする。粉末にするには、方形縁付き石臼(大体、50×35センチ、高さ30センチくらい)と石棒(高さ27、8センチ、最も太い胴部の直径10センチ)とを用いることもある。石棒は、円錐形がかった形をしているが、底部も頭部も丸い。但し、この石臼は、本来、穀類を粉末にするためのものである。

別説として、この炭粉は、コットン・プラントCotton plantの葉を焙焼して作るともいう。また、天然オイルを燃やしたランプのフレームから採ったススを用いるともいう(注2文献、1990年)。

カクナ・オイルは、カクナKākuna (*Canarium Zeylanicum* Bl.) (注4文献の注51)の実を砕いて絞った汁である。この実は、直径2.0~2.5センチくらいの丸い形をしていて酸味があり、これから採った油はランプに用いる。枝節や樹皮からも樹脂Dummala (resinous oil)を採り、膠漆のような用途に用いる(注4文献の注51)。

レジン・オイルは、樹脂、即ち、Dummala oilである。Divul (*Feronia elephantum* Corr.)など、樹脂を多く含んだ木の根茎等を蒸留器に入れて上の口を封じ、火に掛け、焦げないように加熱していくと蒸留器の下の管から暗褐色のオイルがしみ落ちてくる。これを使用するのである。

以上の三種を混ぜ合わせてペーストを作る。

この黒いペーストを擦り込み、文字をくっきり目立たせる工程をカル・メディマkal medimaという。以下には、Bandara氏の所作を記述しよう。

オーラに、六行ほどの文字を刻んだ後、小皿に取ったこのペーストを、丸めた布(タンボン)の先に着け、オーラの左端から擦り込んでいく。

ペーストを塗り付け、これを、まんべんなく擦り広げる。その全面に擦り込んだ後、余ったペーストを古布できれいにふき取る。

次に、白いクラッカKurakkanの粉末を擦り込む。この粉は、先学に、蕎麦の一種の粉末ともライス・パウダーとも説明されている。だが、見るところ、これは、ヒエの種(直径1.1~1.3ミリくらい)を粉末にしたものである。その種の皮はこげ茶色をしているので、あらかじめ、これを剥離し、除かねばならない。

この粉末を小皿に取り、右指、3、4本でこれを撮み取り、オーラの左端から擦り込んでいくのである。主に、右手の人差し指、中指の腹を使う。不足とならば、パウダーを継ぎ足し、その内には、左手の指をも添え用いていく。

オーラの全面に、まんべんなく擦り込んだ後、これを古布できれいにふき取る。それでもと思い、「これが残留して、虫損の因とはならないか?」と問うたところ、「それがないほどにふき取る」とのことであった。

(5) 表紙の板材

写本の表紙poth kambaeの板材には、今、コロンkolonの木を用いる。表紙の表面に彫刻を施す都合上、堅くも軟らかくもないこの板材を用いるのだという。従来、スリランカでは、色彩として、赤や黒などの塗料が用いられることが多かったようだが、アルヴィハーラ寺では、敢えて着色せず、白木のままを用いている。

なお、当寺でも仏歯寺でも、貝葉經典は、紐帯でくくったままの形で書架に保管し、タイ、ミャンマー、ラオスなどにおけるような縦長の布袋や竹帙には納めないようである。

7 ペラデニヤ植物園のコリファヤシ

スリランカでは、写本にコリファヤシを用いること、上に記したとおりであり、そのヤシの植生についても、多少のことは述べてきた⁷⁾。

このヤシは、熱帯性の植物で、かつ、湿気を好む質のようであり、植物図鑑などには、南インドの産、マラバル、ベンガル、アングマン、ジャワ、ミャンマー(ビルマ)、マレーシア(マラヤ)、その他に見られるとある。筆者は、寡聞にして、その実態を知らないが、少なくとも、スリランカにおいては、あちらこちらに自生していることを確かめることができた。随所にたくさん、というほどではないが、ま、各所に見いだすことができるのである。但し、どうしても、それらは山間部においてのことである。

ペラデニヤ植物園は、キャンディから南西へ6キロの地、キャンディのバスターミナルからバスで十分ほど行った所にある。湾曲して流れるマハウェリ川に懐かれたような総面積5.6km²の地に、四千種以上もの熱帯植物が植えられており、その一角に各種のヤシを植えたコーナーがある。そのコーナーに差し掛かるあたりに、一本の大きなコリファヤシが植えられている。年齢は30~40歳だという。(傍らには、その幼木も植えられている。)筆者が、このヤシを、初めて見たのは、1994年3月31日のことであり、この折の状況については、前稿(注4文献)に詳しく記した。

二度目に、このヤシを見たのは、1995年12月10日のことであり、この折は、ちょうど、開花中であつた。樹冠部

にクリーム色がかった黄色いっぽい花房何十本かが大きく咲き広がり(肉穂花序)、天空にゆったりと泳いでいる。高いところであるために、よくはわからないが、穂の高さは6、7メートルもあるうか。今が盛りと見受けられた。各花房は、直径4～5ミリの小さな花が無数に集まったもの(集合体)であり、そうした花は、使命の終わったものから、パラ、パラと、あたり一面に落下しているのであった。その開花期は6ヶ月くらいにも及ぶという。

今回(三度目)、ここを訪れ、このヤシを見たのは、(1997年)5月2日のことであつた。葉は茂ってはいたが、花も花穂も全く見えず、完全に開花期は終わっていた。が、ふと、足下を見ると、その実seedsが、一面に落ちている。しかも、既に、発根・発芽しているものも多い。

実は、こげ茶色で、大体、球形をしている。計測すれば、縦径21～24ミリ、横径19～21ミリで、若干の差がある。また、先のマータレの山中のコリファヤシの実より一回り大きい。これは、この地が管理された植物園で栄養状態がよいせいか、あるいは、日当たりがよいせいかではあるまいか。

地上に落ちた実は、雑草や雑木などの妨げのない限り、ふだんの高温と湿度によって容易に発芽するようである。その実から、まず、根が垂直に地中に伸びる。伸び出したあたりは直径2ミリ前後の太さであるが、10センチ前後、あるいは、15～20センチも地中に入ると、直径は7～8ミリの太さにもなる。ふくらみの先には、長さ5センチ前後の細い直根も着いているが、このふくらみが母体となり、ここから、逆行して葉鞘が、伸び上り、葉芽(単子葉)が地表に真直ぐに伸びていく。そうした緑の、5～6センチ、あるいは、8～9センチの、まだ、葉の開かない子葉が、そのあたりに無数に顔を出しているのであった。[第8図]

これらが、そのまま成長できるほどの余裕はなく、また、その必要もないであろう。しかし、この熱帯気候において、その発根・発芽の、比較的容易であろうことは確認できたであろう。

このヤシは、こうして実を結んだ後、死期を迎えらる。この折は、下葉に多少の衰えは見られるものの、これが枯死に向かいつつある状態とは、まだ、とても見受けられなかった。その枯死までには、やはり、かなりの時日を要するのではなからうか。今後の観察を、でき得る限り、続けていきたい。

おわりに

この時期、スリランカのマータレ、キャンディの午後5時、2時からにせよ、4時からにせよ、まずは、決まって雷雨となった。しかし、6時、7時になると、スコールは上がって陽の差すこともあり、キャンディ湖にはマルワッテ寺院Malwatu Vihareの姿の映ることもあつた。

そうした湖畔では、時を過ごす若いカップルやマンゴー売り、パイナップル売り、髪飾り売り、ネックレス売り、時には、パーム・リーフを用いた占いの中年婦人⁹⁾などが商売をしている。そうした中に、近くの寺院の修行僧と覚しき若い2、3人の、ヤシを模したコウモリガサ⁹⁾をさした姿を見かけることもあつた。

スリランカの貝葉写本Palm Leaf Manuscriptsは、今日、仏歯寺やキャンディ国立博物館、あるいは、コロomboの国立博物館等に所蔵されているものが知られている。だが、それらに限らず、各地の仏寺にも相当の写本が保存されているようである。その一端として、この度は、クルネーガラKurunegalaのドルッフ村Doluwaにあるランキリマダ・ヴィハーラ寺Rankirimada Viharaの貝葉写本を拝見することができた(4月27日)¹⁰⁾。はめ込み式の書架の中には、パーリ語やシンハラ語で書かれた仏典、医薬等に関する大小の写本がぎっしりと並んでおり、その一部は、住職に読誦していただき、録音に収めることもできた。写本の素材、形態、書誌等は、他所におけるところと相違はないように見受けられるが、こうした未調査の写本群が、今なお、住僧と村人に守られ、ヤシ畑の奥にひっそりと存在しているところに、同国の書記文化の奥深さのようなものが感じられる。

なお、本稿と先行文献におけるところとの異同につき、言及しておかねばならない点がある。タイ・ラオス、また、インド、インドネシアなどにおけるリーフの作成方法との比較も必要であるが、今回は、これにて筆を擱くこととする。

—June13, 1997—

注

- 1) 釈迦の生歿年については諸説がある。歿年は、この他、386B.C., 383B.C., 486B.C., 480B.C., などとする説がある。
- 2) 本稿に関しては、次の文献が参照される。

Florence Ratwatte, "The Ancient Art of Ola Writing", *Explore Sri Lanka*, Vol.4-No.2, August 1990.

Florence Ratwatte, "Rewriting History", *The magazine of Air Lanka, Serendib*, Vol.11, No.4, Jly-

Aug,1992.

- 3) シンハラ語で, gasaもgahaも, 木を, また, koḷa, koḷaya (pl) は, 葉, あるいは, 紙, を意味する。
- 4) スリランカでは, この他にパルミラヤシPalmyra Palm, シンハラ語でTal gasa, 学名*Borassus flabellifer*. L.も用いられた。既述「スリランカにおけ貝葉文書・典籍 (Palm Leaf Manuscripts) の作成方法について」(『島根大学教育学部紀要』(人文・社会科学編), 第28号, 1994年12月。69頁)を参照。しかし, 今は, これは用いないとの説明を受けた(Rev.Ethipola Ratanasara Thero師による)。
- 5) 注2の, Florence Ratwatte氏の二文献。
- 6) オーラ本の大きさは, だいたい, 次のようであろうか。

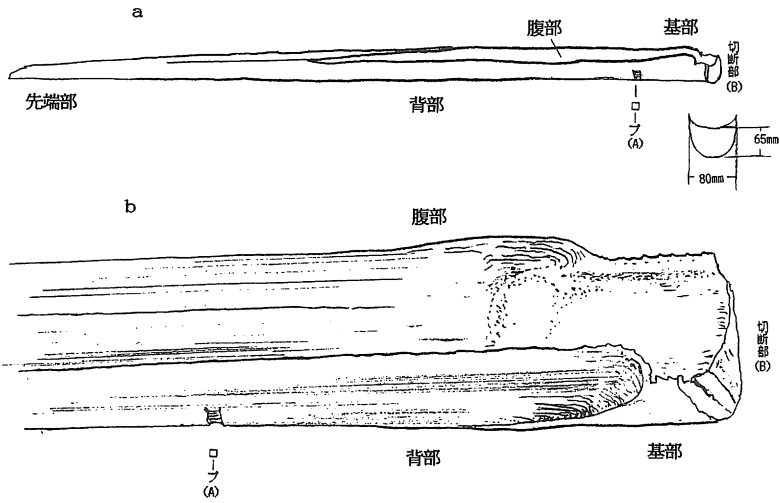
長さ, 大:	67~72~81センチ,
中:	48~50センチ
小:	21~23センチ
幅, 大:	7~8センチ
小:	5センチ

 しかし, Ratwatte氏の二文献, また, W.A.DE Silva氏の記述 (“*Catalogue of Palm Leaf Manuscripts in the Library of the Colombo Museum*”, 1938.注4文献参照)などを見ても, この大小の寸法は, はっきりしない。
- 7) 注4文献。但し, アルヴィハーラ寺で, 現在, パルミラヤシを用いているとした点は訂正しなければならない。最初の訪問時, W.Edwin氏との意志の疎通を欠いたところからの誤りであった。
- 8) 1995年12月8日, 仏齒寺前(クイーンズ・ホテル前)の三叉路を背に, キャンディ湖畔で緑色のビニール袋を敷物代わりにして座り, その上で占いをする婦人に会った。とても上手とはいえない絵の描かれた小型の貝葉本, 神々のカラープリントされたカード, 木の実などを用いての占い商売である(20Rs払って撮影させていただいた)。
- 9) 本来は, 雨傘として, ヤシの葉そのものを用いていた。但し, 一般人は, その尖った葉柄の方を前方に向けるが, 仏教僧は, その葉の向きを逆にするという(既述「17世紀におけるスリランカの書記生活について—ロバート・ノックス著『セイロン島誌』—」, 『島根大学教育学部紀要』(人文・社会科学編), 第30号, 1996年12月。75頁)参照。
- 10) Rohana Chandrajith氏の御配慮による。

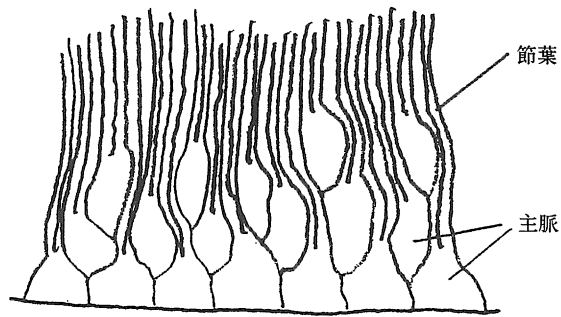
寺のVen.Ethipola Medankara Nayaka Thero師, Rev. Ethipola Ratanasara Thero師, Rev.A.Saranankara師, また, 少年僧達, T.S.Randiligama氏, H.M.K.Bandara氏, Rohana Chandrajith氏, その他, 多くの方々より実に心細かな御指導・御高配をいただいた。記して, 深く感謝申し上げたい。

[付記] この度の調査においては, 調査事項はもとより, 食事から買い物等の私事一切に互って, アルヴィハーラ

[第1図]

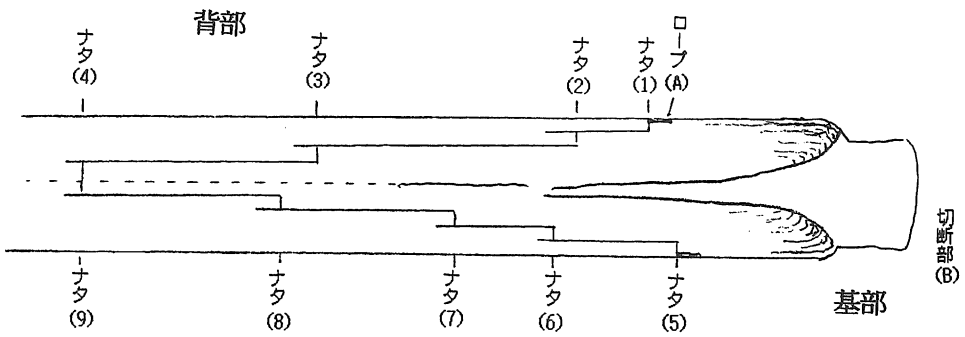


[第2図]

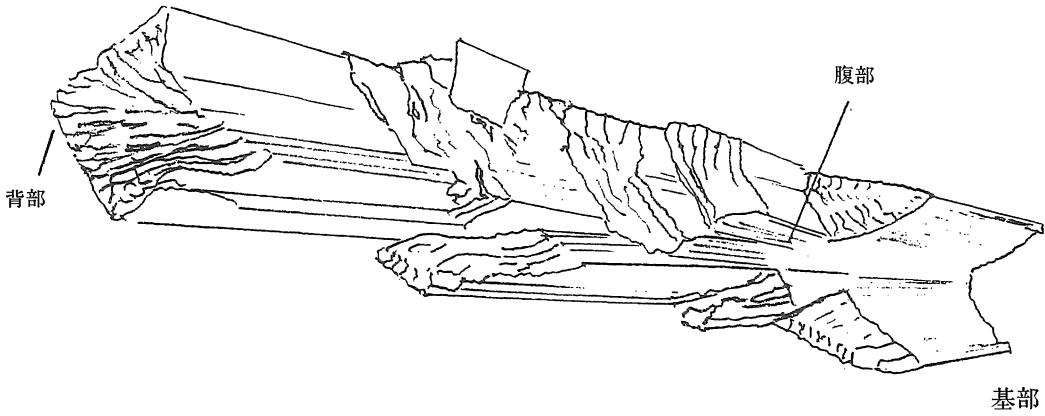


葉芽背部側

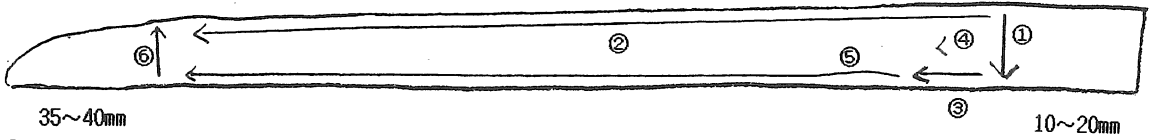
[第3図]



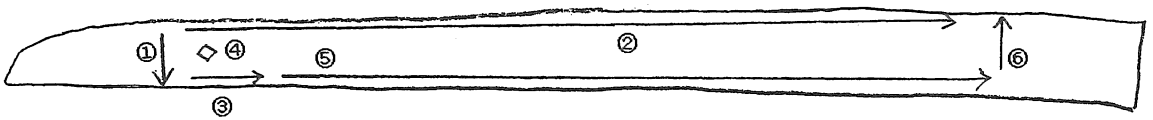
[第4図]



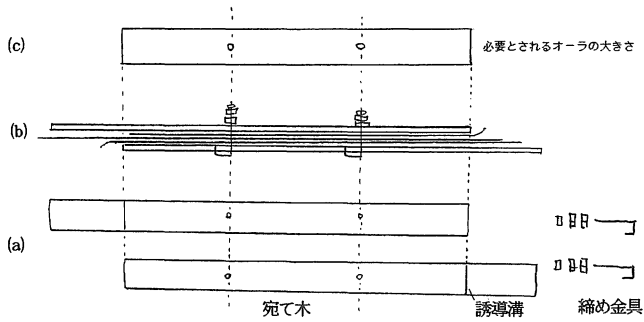
[第5図]



[第6図]



[第7図]



[第8図]

